

氏 名	Gulzat AKMATBEKOVA
学位の種類	博士(観光学)
報告番号	甲508号
学位授与年月日	2019年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	キルギスにおける社会体制転換に伴う観光の変容 ーソ連時代経験者の観光実践を中心にー
審査委員	(主査) 佐藤 大祐 (立教大学大学院観光学研究科教授) 大橋 健一 (立教大学大学院観光学研究科教授) 杜 国慶 (立教大学大学院観光学研究科教授) ダダバエフ ティムール(筑波大学人文社会系准教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

第1章 序論

第1節 研究の背景と先行研究

1. 研究背景と問題意識
2. ソ連における観光研究—西欧とソ連の研究者の視点から
3. ソ連崩壊後の観光研究
4. 体制転換前後の経済・社会研究

第2節 研究目的と対象地域

1. 研究目的
2. キルギスの歴史的背景と社会慣行
3. 「観光」か, 「Tourism」か
4. 資本主義化後のキルギスの観光研究

第3節 研究の方法と枠組み

1. 本論文の構成と分析視点
2. 分析資料
3. インタビュー方法と内容
4. ライフヒストリーの先行研究と本論文の併用資料

第2章 キルギスにおける観光の展開

第1節 帝政時代における観光

1. 帝政ロシアにおける観光
2. キルギスにおける観光の胎動

第2節 ソ連時代における観光

1. 初期のプロレタリア観光とその挫折
2. ソ連政府・共産党主導の観光発展
3. ソ連時代におけるキルギスの観光

第3節 資本主義化以降の観光

第3章 キルギスにおける社会階層と観光

第1節 キルギスにおける社会階層

第2節 社会階層別にみたキルギス国民の観光

1. ソ連時代における社会階層別の観光
2. 資本主義化以降の社会階層別の観光

第4章 ソ連時代経験者のライフヒストリーからみるキルギス国民の観光

第1節 社会体制転換に伴う社会階層の移動類型

第2節	エリート・インテリ層から基礎階層に転じた者
1.	ソ連時代の観光
2.	資本主義化以降の観光
第3節	インテリ・エリート層から新興富裕層へ達した者
1.	ソ連時代の観光
2.	資本主義化以降の観光
第4節	労働者・農民から基礎階層へ移行した者
1.	ソ連時代のコルホーズ農民の観光
2.	資本主義化以降の観光
第5節	ソ連時代経験者のライフヒストリーからみた社会階層と観光の関係
第5章	キルギスにおける社会体制転換と観光に与えられた役割・意味の変容
第1節	観光に関わる制度・制約・仕組み
第2節	観光の動機
第3節	観光の社会的機能
第4節	観光に付与された意味
第6章	結論
付録	用語説明
	謝辞

(2) 論文の内容要旨

観光は余暇に行うレクリエーションを主目的とした行動で、その際に移動や一時的滞在を伴うもの、あるいはそれらの関連現象とされる。このような観光の概念は資本主義社会を前提としたものであり、社会主義をはじめとする様々な社会体制を踏まえた議論により拡張される可能性を秘めている。社会主義体制下の観光に関する既存研究には、党・政府が観光に与えた役割や機能を解釈したものや、計画経済を前提にした施設立地や配分効率を分析したものがあるが、いずれも観光を俯瞰的に捉えた研究である。一方、体制転換前後の経済・社会に関する研究が一定数あり、その中でも企業経営と労働者への分析結果は、社会転換期には企業内の人間関係や組織への帰属意識の変化といった個人の分析が重要であることを示唆している。そこで本論文は、社会主義と資本主義の二つの社会体制を経験したキルギス国民のライフヒストリーから、体制転換に伴う観光の変容を、観光に関わる制度・制約、観光の動機、観光の社会的機能、観光に付与された意味を中心に解明した。なお、個々人の社会階層は、それぞれが持つ知識や能力、加齢によって移り変わる可能性があるが、本論文では調査時点で回答のあった社会階層に限定した。

帝政時代までの移牧社会から社会主義社会を経て資本主義化するに至ったキルギスでは、

観光それ自体や観光に与えられる意味も変貌してきたと考えられる。そこで第2章では、先行研究に依拠しながらキルギスにおける観光を帝政時代、ソ連時代、そして資本主義化以降の3期に分けて整理した。第3章では、87人のキルギス国民へのインタビュー調査から、ソ連時代と資本主義化後での社会階層間移動と彼らの観光実践との関係を分析した。主要な社会階層は社会主義時代と資本主義化後それぞれに4つずつであった。そのため、社会階層の考えられうる移動類型（社会主義時代から資本主義時代にかけて人々が移動した階層の組合せ）は16存在することになるが、各階層が行っていた観光の種類を指標に加えた結果、移動類型は4つとなり、そのうち主要な3類型からそれぞれ事例3名を選んだ。第4章ではこの3名を中心とするライフヒストリーを分析し、その結果をもとに第5章で観光に与えられた役割と意味の変容を考察した。

旧ソ連における観光は、党・政府によって巧妙に階層化され、配給制度を通じて、国民が国家や社会秩序を肯定し、国家への信頼と帰属意識を高める役割を果たした。人々は観光を職場の人間関係を駆使して入手するなど、観光は労働の延長線上にあったとも言える。特に旧ソ連における少数民族のキルギス人にとって、ソ連時代の観光は人脈作りなど人生の可能性を広げうる点で重要であった。資本主義化後、ソ連社会の秩序や規律が失われると同時に、観光には親類・部族内の相互扶助やキルギス民族のアイデンティティの投影など、社会の安定化と新秩序への再構築の役割が課されている。このように、本論文が解明したのは、観光が単に余暇の非日常的な娯楽を目的とするのみならず、個人の階層内地位の確認や他者との差異化・同化等を動機として、他者との関係性の中で実践されてきたことである。そうすることで二つの社会と階層間移動を経験した人々は観光を通して自らを変動する社会に絶えず位置づけ直していたことも解明された。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

これまで資本主義社会を前提としてきた観光の概念は様々な社会体制を踏まえた議論により拡張される可能性を秘めている。本論文は、社会主義と資本主義の二つの社会体制を経験したキルギス国民のライフヒストリーから、体制転換に伴う観光の変容を、観光に関わる制度・制約、観光の動機、観光の社会的機能、観光に付与された意味を中心に解明した。今日の資本主義社会の観光は、個人が自らの意思で選択し余暇に楽しむものと考えられているが、その対象はメディア等によって作られたものであるとも言える。一方、社会主義社会である旧ソ連における観光は、党・政府によって憧れの対象から誰でも実施可能なまで巧妙に階層化され、配給制度を通じて権力上位の者の特権意識の自己確認と労働者の労働意欲の向上を促した。結果として観光は、ソ連国民が国家や社会秩序を肯定し、国家への信頼と帰属意識を高める役割を果たした。中には農業活動のような労働に準じるものもあり、また人々は観光を職場の人間関係を駆使して入手するなど、観光は労働の延長線上にあったとも言える。特に旧ソ連における少数民族のキルギス人にとって、ソ連時代の観光は人脈作りなど人生の可能性を広げうる点で資本主義化後よりも重要であった。それでも人々は観光に娯楽や癒しを求めており、この点は資本主義・社会主義を問わず両社会に共通する観光の基底部分である。資本主義化後に階層間移動を経験する中で、富裕となった者は他者との差異化のために、富裕でない者は他者との同化のために観光を消費しており、観光に与えられた意味は階層分化しつつある。その一方で、ソ連社会の秩序や規律が失われると同時に、観光には親類・部族内の相互扶助や、制約から解放されたキルギス民族のアイデンティティの投影など、社会の安定化と新秩序への再構築の役割が課されている。ただし、資本主義化後に導入された観光を忌避する者もおり、観光の動機や実践はソ連社会で育まれた彼ら自身の文化資本に左右されてもいる。

(2) 論文の評価

従来の観光研究においては、資本主義社会の観光をめぐる議論が自明視される傾向にある一方で、社会主義社会に関する観光研究も党・政府が観光に与えた役割や機能を解釈したものに留まっていた。これに対して本論文は旧社会主義国における観光の経験や動機など個人の領域に着目し、筆者独自のキルギス国民の口述記録を収集した点に希少性がある。本論文が解明したのは、観光が単に余暇の非日常的な娯楽を目的とするのみならず、個人の階層内地位の確認や他者との差異化・同化等を動機として、他者との関係性の中で実践されてきたことである。そうすることで二つの社会と階層間移動を経験した人々は観光を

通して自らを変動する社会に絶えず位置づけ直していたことも解明された。以上のことから、本論文は観光研究として、また旧ソ連の中央アジアの地域研究として優れた価値を有する。

審査会では、観光の概念規定、キルギスに根差した社会習慣の取り込み、口述記録の分析・解釈手法などについて今後の課題や研究の可能性が示されたが、これらは本論文の研究上の貢献を損なうものではなく、本論文の成果をより精緻化し発展させていく方向性をもつものと判断した。審査委員は、本申請論文の観光研究としての独自性と研究上の貢献を高く評価し、博士の学位に相当するとの見解で一致した。